

これからいただく「灰」は、生命のはかなさ・弱さのシンボルです。神のみ前で、人間は塵に過ぎません。神様に造られた小さな私を自覚し直します。そして、私たちは、神様からいただいたものを全て神様にお返しします。「私自身が灰に帰るのはどのような意味があるのか？」考えてみました。イエズス会に入る前のことを思い出しました。営業マンは、売れないとクビになる、仕事がなくなってしまいます。そんなプレッシャーに苦しんでいた私は、「仕事はしますからどうか私に仕事を与え続けてください」と願っていました。仕事が増えるのは、もともとは望んでいたことなのかもしれません。最初の頃の自分に戻ることも、灰の水曜日の大事なことだと思いました。皆さんも、洗礼を受けた頃の期待感、望みの強さ、神様に自分を捧げようとする強さを思い出しましょう。

第2朗読の一つの言葉に注目しましょう。最後に「今や恵みの時、今こそ救いの日。」(第2コリント書6：2)とされています。「今」というこの言葉の意味を黙想することはとても大切なことです。「今」という言葉は、神の恵み、回心への招き、生活の変化が明日のことではなく、今日のこと、今のことだと思い知らせてくれます。私たちの大きな誘惑は、何か良いことをしようとする時(もっとよく祈りたい、もっと勤勉でありたい、赦したいなど)、明日しようと思えることです。けれども、聖書は、この恵みが「今」だと言っています。「今」私たちは神の恵みを受け入れなければならない。「今」私たちは赦さなければなりません。「今」私たちは希望しなければなりません。「今」私たちは変わらなければなりません。「今」こそ受け入れる時、救いの時です。私たちがいただく神のみ言葉は、一般的に語られたのではなく「今」のこととして語られています。この理解がとても大切です。「わたしは今日、今、あなたと共にいる。」という神様のメッセージそのものだからです。だから私たちも「もっとゆとりがある時を」とか「もっと良い条件の時まで待とう」という態度ではダメです。「今」がその時です。「今」が神の救いを受け取る時、「今」が和解の時です。もちろんこの「今」は、教会暦年の間何回も繰り返されています。でも、神の恵みは「今」受け取って実行するもの、と理解しましょう。

福音についても、一言お話しします。この福音の箇所には、私がとても大事にしているイエスの言葉が3回も繰り返されています。「隠れたことを見ておられる父が報いてくださる。」という言葉です。とても大切なので3回も語られています。私たちは、毎日たくさんのことをします。そして、時にはそのことで満足します。他の人々に何か良いことをすることで何か報いを得ることもあります。けれども、誰からも報いが得られないそのような時が肝心で、その時こそ私たちは神のみ前に真実です。行っていることの意味や実りをはっきりと理解できないとき、私たちは、神のみ前に本当に自由で真実なのです。「主は私を知っておられる。」「主は密かに私に報いてくださる。」私たちの人生の中で、この体験が救いになります。私たちにはこのことがよくわからないかもしれませんが、これは神様が保証してくださる現実です。そう受け止められると、私たちは、見えないことが見えることよりも豊かなことを理解し始めます。私たちの日常生活が永遠の世界に入り込みます。この瞬間を体験できる時、私たちには大きな喜びになります。

神は私たちの心の思いを見通され、私たちが何を神に差し上げることができるかをご存知です。その神様に向けて、これから始まる四旬節、自分を整えていきましょう。灰をいただく私たちが、恵みの「今」、和解の「今」、喜びの「今」を体験できるように願いましょう。